

平成22年5月17日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520286
 研究課題名（和文）収録字の配列方法より考察した中国辞書史の研究
 研究課題名（英文）A Study of the History of Chinese Lexicography based on the Arrangement System of Characters
 研究代表者
 花登 正宏（HANATO MASAHIRO）
 東北大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号：60107175

研究成果の概要（和文）：

本研究は、収録字の配列方法という観点より、中国辞書史を考察しようとしたものである。漢字には字形・字音・字義の3つの要素があり、このおのをおのを配列の手段、換言すれば検索の手段とする伝統的な辞書が存在する。まず字義により配列された『爾雅』が最初に成立し、ついで字形により配列された『説文解字』が成立、字音により配列された「声類」・「韻集」の成立は最も遅れた。その理由は、配列手段の分析の難度の高いものほど、その成立が遅れたのである。また、字形を配列の手段とする辞書で、部首及び収録字の双方を画数綫に配列した辞書は、従来『字彙』（1615年）とされてきたが、それに先んじて『洪武正韻彙編』（1602年）のあることを初めて指摘した。

研究成果の概要（英文）：

This study was planned to study the history of Chinese dictionaries from the point of manners of arrangement of entries, that is, Chinese characters. Every Chinese character is composed of three elements, form, sound and meaning, so we have three kinds of traditional Chinese dictionaries which are arranged by one of these three elements. Historically speaking, firstly “Er-ya 爾雅” arranged by meaning of character was completed, secondly “Shuo-wen Jie-zi 説文解字” arranged by form of character was completed, lastly “Sheng-lei 声類” arranged by sound of character was completed. I revealed the reason why the three types of Chinese traditional dictionaries were completed in this order is due to degree of difficulty in analyzing form, sound and meaning of Chinese character.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国辞書史・文字の配列・形書・義書・音書・画数・洪武正韻彙編・益会玉篇

1. 研究開始当初の背景

中国の文字である漢字は、形・音・義の3つの要素を持ち、このおのおのを配列の手段、換言すれば検索の手段とする伝統的な辞書が存在する。本研究課題は中国の伝統的な辞書を収録字の配列（検索）という観点から考察し、新たな中国辞書史を構築することを目的としたものである。中国の辞書、あるいは辞書の歴史について論じたものは国の内外に乏しくなく、例えば国外では、林明波『唐以前小学書之分類與考証』（東呉大学中国学術著作奨励委員会、1975年）・陳炳超『辞書概要』（福建人民出版社、1985年）・錢劍夫『中国古代字典辞典概論』（商務印書館、1986）・林玉山『中国辞書編纂史略』（中州古籍出版社、1992年）・曹先擢等『八千種中文辞書類編提要』（北京大学出版社、1992年）、国内では福田襄之介『中国字書史の研究』（明治書店、1979年）・大島正二『中国言語学史』（汲古書院、1997年）などを即座に指摘することが出来る。しかし、その中身を詳細に検討してみると、中国の伝統的な辞書変遷の歴史を、字形・字音そして字義という、漢字の3要素のいずれを収録字の配列（検索）方法として採用し、かつそれらがどのように進歩・発展してきたかという視点から総合的に論じたものはなく、ここに収録字の配列という観点から辞書史を構築することを目的とする本研究課題の特色がある。

なお、中国の伝統的な辞書は一般に漢字一字を収録の対象とするが、以下の報告では、これらのうち字形を配列の手段としたものを字書、音を配列の手段としたものを韻書、字義を配列の手段としたものを義書、それらを総合した場合には辞書と呼ぶこととする。

2. 研究の目的

漢字には形・音・義の3要素があり、その各々を収録字の配列、従って検索の手段とする辞書が存在する。字形を配列の手段とする狭義の字書、字音を配列の手段とする韻書、そして字義を配列の手段とする義書がそれぞれである。本研究課題は収録字の配列方法に注目し、この観点より中国歴代の種類の辞書を分析し、新たな辞書史を構築しようとする試みである。本研究課題を遂行することにより、中国の伝統的な辞書の全貌、辞書間の継承関係が明らかになるはずである。

3. 研究の方法

本研究課題の研究は、以下の手順により行われた。

（1）資料の整備

①『四庫全書』・『四庫全書存目叢書』・『続修四庫全書』、そして『四庫未収書輯刊』など影印資料よりの資料収集。

②中国での収集。中国では、辞書資料そのもののほか、関係資料の収集も行った。

（2）資料の整理

次には、収集した文献資料を解読し、必要な部分については、順次パソコンなどに打ち込むなどして、資料の整理を行った。解読は辞書の本文のほか、それに付された序文や跋文に就いても行った。

（3）資料の分析・解明

収集・整理した辞書を中心とする収集資料の分析と解明を行った。

（4）考察及び成果の公表

分析・解明の終了したものについては、他の辞書資料との継承関係いかにに関して特に意を払いながら考察を加え、結論の出た部分については、その成果を順次公表した。

4. 研究成果

以下に科学研究費交付中に得られた研究成果について、年度別に記述することとする。

（1）平成19年度における研究成果

平成19年度は、本研究課題に関わる2篇の論文を公刊した。「《洪武正韻汇编》在中国字書史上的地位」は、明代万曆30年（1602）の序のある周家棟編『洪武正韻彙編』の中国字書（辞書）史上における位置を明らかにしたものである。部首により配列された字書は後漢・許慎の『説文解字』を嚆矢とする。ここに部首引き字書の歴史は始まる。しかし、『説文解字』における文字の配列は、部首は「始一終亥」という許慎の宇宙観に基づいて配列され、それら部首の各々にその部首を持つ字が繫属されるというもので、部首配列の字書であることは疑いないものの、部首配列の字書ということから我々が想像するような、部首も収録字もともにその画数により配列するという配列方法を採用していない。そして、このような部首、そして文字の配列方法が、『説文解字』に続く晋の呂忱の「字林」、梁・顧野王の「玉篇」等の字書に採用されてきたのである。そして、従来の中国辞書史においては、部首・収録字双方を各々の画数により配列した字書の出現は明代梅膺祚の『字彙』（万曆43年（1615）梅鼎祚序）まで待

たねばならないとされてきた。本論文は『洪武正韻彙編』の内容及び関係資料を精査することにより、部首・収録字を画数順に配列した最初の字書は『字彙』ではなく、韻書『洪武正韻』を部首による字書に再編した『洪武正韻彙編』であることを明らかにしたものであり、中国字書（辞書）史に新たな1頁を加えたものである。

「編纂《古今韻會舉要》的目的」は、元代を代表する韻書である熊忠撰の『古今韻會舉要』の辞書としての性格について考察したものである。韻書という書物は、その成立の当初にあっては押韻字検索を唯一あるいは主たる目的として編纂されたものであることは疑いない。しかし時代が下ると、例えば『広韻』は「將以韻書為類書」（『四庫提要』「重修廣韻」提要）と評されるように、押韻字検索よりも、むしろ字積の豊富さを誇示する方向に向かう。一方、『古今韻會舉要』については、その字積は「將以韻書を以て類書と為さんとす」る『広韻』より詳細なことが筆者の考察により明らかとなっている。本論文においては、『古今韻會舉要』を増訂して成った明・方日升撰の『古今韻會舉要小補』と『古今韻會舉要』の字積とを比較し、『挙要』のどのようなところをいかに増訂したかを詳細に検討することにより、『挙要』の辞書としての性格を明らかにしようとしたものである。その結果、熊忠は訓詁を主とし、且つその出典を明記した大部な韻書、というよりもむしろ「韻引きの類書」を編纂することを企図して『古今韻會舉要』を編纂したことが明らかとなった。韻書というのはその成立当初にあっては、いうまでもなく押韻字検索のための字書であったが、時間の経過につれて、韻を配列の手段とするところから韻書の範疇には入れられるものの、その実際の用途には実は多様なものがあることを指摘したことは、評価されてよいと考える。

（2）平成20年度における研究成果

平成20年度は報告を1回行い、その報告をもとにまとめた1篇の論文を公刊した。公刊した論文「収録字の配列方法より考察する中国辞書史の構想」は、平成19年度公刊した2編の論文を踏まえ、中国の多様な伝統的辞書を、その収録字の配列という観点から分析した場合、一体どの様なことが明らかとなり、従来と異なった辞書史となるのか、その構想を提示したものである。本論文では、歴史的に3種の辞書の中では『爾雅』に代表される義書が先ず成立し、次いで『説文解字』を嚆矢とする形書、最後に魏の李登の「声類」、晋

の呂静の『韻集』等の韻書が成立したことを示し、このような成書の順になった原因は、配列の手段である字義・字形・字音の分析がこの順序で困難である所に求められることを明らかにした。ついで、昨年度の研究で明らかにしたように、『洪武正韻彙編』は部首・収録字双方に筆画順を採用した最初の形書であり、中国辞書史は訂正される必要のあることを指摘した。最後に、音書は、先ず詩文の平仄・押韻字検索のための詩韻の書として魏晋のころに成立したが、後になると戯曲のための曲韻、詞のための詞韻が成立するにいたったこと、そして、詩韻は収録字をまず声調によって分け、ついで韻によって分けるのに対し、曲韻の書の祖である『中原音韻』は、収録字を先ず19の韻に分け、そののち声調によって分けること、また、詞韻について、いま『詞林正韻』によりその体裁を説明すると、収録字を先ず韻によって分けるのは曲韻に同じいが、各韻のなかは平声と仄声に区分し、また曲韻とは異なり入声韻を独立させている。3種の音書がこのような体裁となっていることを明らかにした上で、これら3種の音書がこのようにその体裁を異にするのは、対象とする韻文の押韻方法の違いによるものであることを指摘した。

（3）平成21年度の研究結果

平成21年度は、字形により収録字を配列する形書（字書）について考察を加えた。形書の嚆矢である『説文解字』（100年）は、部首により収録字を配列したが、540の部首の配列は「始一終亥」という、著者許慎の宇宙観に基づいており、極めて検索しにくい形書であった。『説文』に次ぐ形書である『玉篇』（543年、原本佚。いま『大広益会玉篇』により、以下『玉篇』と称する）も部首の数を542部としただけで、配列方法は『説文』と同様であった。形書の検索の便を図るため、部首に加えて、部内の収録字をも画数順に配列したのは、従来は明・梅膺祚『字彙』（1615）とされてきたが、本課題による研究により実は明・周家棟編『洪武正韻彙編』（1602年序）であることはすでに前年度に明らかにした。しかし、中国では近代に至って、始一終亥方式の『説文』や『玉篇』に索引が付されることはあっても、その配列方法そのものを『洪武正韻彙編』・『字彙』に倣って改めようとする試みはなされることはなかった。一方我が国の状況については、岡井慎吾『玉篇の研究』により、『玉篇』の慶安2年刊本（1649）には部首を画数順に配列した索引が付され、『玉篇奇字早鑑』（1653）という書では『玉

篇』所収の文字について、部首も部首内の文字も画数順に配列されている、あるいは『玉篇』の寛文3年刊本(1663)は、『玉篇』を『字彙』風に組み換えたものである等の貴重な指摘がなされている。しかし、その論及にはなお十分でないところがあるように思われたため、筆者においても関係資料を収集し、中味の検討を試みたところ、岡井氏の検討には誤りと思われるところ、なお不十分なところが少なくないことが明らかとなった。氏は、部首を画数順に配列したのは『字彙』によつたためとされるが、これについては『洪武正韻彙編』に依つたものである可能性があり、『玉篇奇字早鑑』の部首数は556であり、『玉篇』の部首が542部であるのと齟齬するなど、なお検討を要する点が多い。本年度は、部首の数、部首内の文字、部首の配列順等について、関係資料間(『玉篇』の諸版本、『玉篇奇字早鑑』、『洪武正韻彙編』、『字彙』)での突き合わせを行った。検討はなお続行中であり、その結果の公表は、将来に待ちたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 花登正宏、収録字の配列方法より考察する中国辞書史の構想、東北大学中国語学文学論集、査読無、2008、第13号、1-24
- ② 花登正宏、編纂《古今韻会举要》的目的、中国伝統文化与元代文献国際学術研討会会議論文集、査読無、2007、62-67
- ③ 花登正宏、《洪武正韻》在中国辞書史上的地位、語苑擷英、査読無、1巻、2007、269-279

[学会発表] (計1件)

- ① 花登正宏、字書・音書・義書—収録字の配列方法よりする中国辞書史の構想、「琉球官話と中国のことば」研究会、2008年6月28日、琉球大学法文学部

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

花登 正宏 (HANATO MASAHIRO)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60107175

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし